

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

動物にせよ、植物にせよ、本来仕事はしない。ライオンは狩りをするが、①狩りがライオンの仕事なのかというと、それはちよつと違つたろう。ライオンに職業を尋ねたつて意味がない。ライオンは生きるために、狩りをし、肉を食らい、排泄を行う。休息もとるが、それは「オフ」ではない。すべてが②生きるための営みなのだから、彼らの暮らしにオンもオフもないのである。もちろん、ウィークエンドも有給休暇も存在しない。

人間の暮らしだって、かつてはライオンと同じだったはずだ。③働くという概念はなく、ただ生きるための営みだけが存在していた。

昔話の中に登場する日本人の暮らしぶりは、そこまではないにしろ、現代の私たちの生活とはかけ離れている。働くことと生きることは限りなく④同義に等しく、人は生きるために日々ひたすら働かなければならなかった。加えて、昔々の日本では庶民が、⑤一攫千金とか一発逆転とか、立身出世を成し遂げることは、殆ど不可能だっただろう。「それは、今だって同じだ」と思つかもしいないが、⑥当時は今より格段にその可能性が低かつたことは⑦想像に難くない。なにせ、テレビも携帯電話もインターネットもない時代だ。自分を取り巻く環境以外に、別の環境があるということすら知らぬまま一生を終える人だって珍しくはなかつただろうし、それに、その頃の人々は身分や土地に厳しく縛られていた。

「もつと、自分に合った仕事があるんじゃないかなあ」なんて考える余地も「もつと、ビッグになつてやる」なんてハッパするチャンスも与えられていなかったのである。

⑧それでも……それなのに、人間は夢を思い描くことができる。ひよつとして、幸運に見舞われはしまいかと妄想をふくらませたりする。ライオンはもちろん、妄想なんて抱かない。どれだけエサが捕れなくても、「ああ、どつから獲物が降つてこないかなあ」なんて考えないし、「明日、目が覚めたら俺、狩りの達人になつてねえかなあ」なんて思つたりもしない。

厳しい現実の中にあつて、幸福を夢見たり、⑨虫のいい空想に耽るのは、人間の性であり、人間の才能だろう。だから、昔話では好んでサクセスストーリーが語られる。

桃太郎は、鬼ヶ島の鬼から宝物をぶんどつて、育ての親のお爺さんとお婆さんに恩返しをするし、花咲か爺さんは愛犬ボチのお蔭で大判小判を掘りあてたばかりか、枯れ木に花を咲かせて殿様からのご褒美まで手に入れる。岡山市に伝わる「こんぞう虫」という昔話も、思い掛けず福を手に入れた母子の物語である。

昔々、備前の国に貧しい母子が⑩ひつそりと暮らしていた。朝から晩まで、働いても働いても暮らしは一向楽にならず、そのうえ、ある年、母親が病に臥せつてしまった。⑪いよいよ生活に窮した母子は、相談のうえ、親戚の権三おじにお金を借りに行く。一度は嫌々ながら銭百文を授け与えた権三だが、年越しの金の「クメン」がつかず再び息子が借金を申し込むと「貧乏人が年越しの用意など生意気だ」と怒つて追ひ返してしまふ。ところが、⑫とほとと家路を辿る息子の前に謎の老人が現れ不思議な一本歯の下駄をプレゼントしてくれるのである。その下駄は、足に履いて一度転べば小判が一枚出てくるという有り難い宝物で、ただし欲をかって転び過ぎると体が小さくなつてしまつから注意しろ、と老人は息子に釘をさす。半信半疑ながら息子は家に帰ると母親の前で下駄を履き、ころりんと転んでみる。すると、小判が一枚チャリンと飛び出す。もつ一度転ぶと、小判がもう一枚。喜んだ母子

が、出てきた小判でさつそく正月の餅を設え近所に振る舞つてみると、そこに評判を聞きつけた権三がやつてきて、息子の「セイ」も聞かずに、お宝の下駄を持ち去つてしまふ。家に帰つた権三は「さあ、たつぷり小判を出すぞ」と張り切つて下駄を履き、座敷に広げた筵の上で、ころりん、ころりと転ぶのだが欲張つて転び過ぎたせいで体が「チヂみ」とうとうと「こんぞう虫」という虫けらになつてしまつたのだそう。

この話では結局、謎の老人の正体も、何故老人が貧しい母子に宝物を授けてくれたのかも語られていないが、貧しい者が福を授かる話が一種の報恩譚として語られる場合もある。

雪をかぶつた峠の地蔵に笠をさしかけてあげたお爺さんに地蔵が福をもたらず、笠地蔵や、子ども達にいじめられていた亀を助けてやつたお返しに竜宮城へと誘われる。浦島太郎などの物語が⑬そのパターンだ。

しかし、心優しい正直者だけが常に福を授かるのかというと、そうでもない。昔話の中では、とんでもない怠け者がちやっかり幸福を手に入れることも珍しくはないのである。

仕事にもつかず、ごろごろと寝てばかりいる、三年寝太郎という男は、福の神のふりをして隣の村の長者の家にに向き「これ、長者よ。隣村におる三年寝太郎という男を、この家の娘婿に迎えれば、家はますます繁昌まちがいなし」などとうそのお告げで長者を騙し、まんまとその家の智に収まつてしまふ。

うそつきが罰せられることなく、幸せになつて終わる物語は一見理不尽なようにも思えるが、これもまた昔話の定石から外れてはいない。弱者と強者が入れ替わり、貧しい者が富める者となる逆転劇こそ昔話の醍醐味なのである。いくら主人公が、ぐうたらで、うそつきでも、騙す相手が富める強者であるなら観客は誰も文句を言わないのだ。

福の神は気まぐれだ。正直者にも、うそつきにも。働きの者にも、怠け者にも。心優しい人にも、ずるがしこいやつにも。ふと思いついたように福を授けてくれる。これは「アンガイ」、昔も今も変わらぬ実感ではないだろうか。正直に、真面目に働いてさえいれば成功するといふものでもない。人に優しい人間が得をするわけでもない。それでも……いや、それだからこそ、人間は可惜夢をふくらませる。次は自分が幸運を手にする番ではないかと期待を抱き続けることができるのだらう。

昔話の中で福を授かる人のパターンは様々だが、ひどい目にあう人はいつも決まつている。他人の幸運をねたみ、欲張つて、ひとの真似をしようとする者だ。

一本歯の下駄を羨み、自分も肖ろつと欲をかって虫になつた権三のように、欲張つてひとと真似をする者は徹底的に戒められる。

花咲か爺さんの隣のお爺さん、然り。土産の葛籠はしきにお爺さんの真似をして雀のお宿を訪ねていった。舌切り雀のお婆さんも、手痛いしつぺ返しを受けることになる。

⑫ 他人の幸運を羨まず、分を弁えること

これは、働いても働いても、なかなか現状から脱却できない昔の人々が考へついた暮らしの知恵だったのかもしれない。

(「昔話の「働きの者」と「怠け者」」富安陽子)

問一 ①「狩りがライオンの仕事なのか」というと、それはちよつと違つたろう」とありますが、筆者がそのように考える理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、ライオンにとって狩りは何も考えなくてもできることから。
イ、ライオンは休みなく毎日のように狩りをして生きているから。
ウ、ライオンが狩りをしてもらいがいを感じられるわけではないから。
エ、ライオンは生きるために欠かせないこととして狩りをするから。

問二 ②「生きるための営み」とありますが、昔話の登場人物にとつての「生きるための営み」として最もふさわしくないものを選びなさい。

ア、川で洗濯せんたくすること イ、山の木を切つて薪きんにすること
ウ、枯れ木に花を咲かせること エ、お弁当におむすびを作ること

問三 ③「働くという概念はなく」⑦「想像に難くない」とありますが、どういふことですか。次から最も適切なものを選びなさい。

③「働くという概念はなく」
ア、働く意味が見つからなくて イ、働くという発想がなくて
ウ、働くとは何か分からなくて エ、働くための条件がなくて

⑦「想像に難くない」
ア、容易に想像できる イ、間違いなく想像する
ウ、想像することが困難だ エ、想像できなくもない

問四 ④「同義」の「義」と同じ意味で「義」が用いられている熟語を選びなさい。

ア、正義 イ、意義 ウ、義足 エ、義理

問五 ⑤「一攫千金かくせん」の夢とは反対に「根気よく続ける」とことや「苦勞する」ことに価値を置いたことわざの空欄を補充しなさい。

1、() (石をうがつ)
2、石の上にも()
3、骨()を惜おします

問六 ⑥「当時は今より格段にその可能性が低かった」のはなぜですか。當時が今と違う点をそれぞれ二十字程度で二点挙げなさい。

問七 ⑧とありますが、人間が夢を思い描くことは、昔話を読む(聞く)こと、どのような関わりがあるか、書きなさい。

問八 ⑨とありますが、どういふことを「虫がいい空想」といふのですか。最も適切なものを選びなさい。

ア、自分にとって常に最高の結果ばかり夢見ていること
イ、決して実現することはないのに夢見ていること
ウ、だれもが幸せになる未来を思い描いていること
エ、努力もせずに自分の成功する姿を思い描いていること

問九 ⑩「ひっそりと」⑪「とほとほ」はそれぞれどのような様子を表していますか。最も適切なものをそれぞれ選びなさい。

ア、落ち着きがない イ、こころやすい ウ、ほほえましい
エ、目的がない オ、元気がない カ、つつましい

問十 ⑩「いよいよ生活に窮きゆうした母子」とありますが、この時の母子の状態として最も適切なものを選びなさい。

ア、誠実に生きてきたのに、幸福が他人にばかり与えられることをうらやんでいる。
イ、誠実に生きてきたのに、いつまでたつても貧乏ひんぼうのままなので悲しんでいる。
ウ、誠実に生きてきたのに、これ以上どうすることもできなくて困っている。

エ、誠実に生きてきたのに、苦しいことが限りなく起きる現実を嘆なげいている。

問十一 ⑪「そのパターン」とはどのようなパターンですか。わかりやすく説明しなさい。

問十二 ⑫「他人の幸運を羨うらやまず、分を弁わえること」とありますが、「分を弁わえる」ことは、「こんぞう虫」の話の中でだれのどのような行いに表れていますか。わかりやすく書きなさい。

問十三 この文章の感想として、本文の内容とあうものを次から選びなさい。
ア、昔話は時に残酷で理不尽りふじんさを感じることがあるけれど、働いても働いても暮らしが楽にならない庶民しやくみんの強いうらみのようなものがあらわれていたのかな。そう考えると切実さが伝わってくるね。

イ、昔話って私は納得なつぐいかない。怠け者でも幸せになれるのだとしたら、みんなが働かなくなってしまうんじゃないかな。福の神はどうして怠け者にまで福を授けたりするのかわからないよ。

ウ、昔話での「幸福」ってわかりやすいよね。だいたいがお金持ちになつて、悪い人は懲らしめられる。誰もが思い描くハッピーエンドのこととで、人間のあるべき姿を示してくれているのかもしれないね。

エ、昔話には人々の理想が書かれている、とは一口に言えないところがおもしろいね。努力しても弱者であることから逃のがれられないからこそ、物語の中では夢を描きつつも、欲張よくばることには釘くわをさされているんだ。

問十四 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

a ハツブン b クメン c セイシ d チヂみ e アンガイ

二 一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

本文中の①は注として付記したものです。

「日本最低の山」は、大阪湾にある天保山（標高四・五メートル）と認定されている。国土地理院が設置する「三角点」は地図a計測上の重要度に応じて一等から四等までのランクがある。天保山は二等三角点がある山々の中でもっとも低い標高をもつという意味で、「日本最低の山」なのである。もっと数が少ない一等三角点をもつ山に限定すれば、「日本最低の山」の榮譽は同じく大阪の堺市にある蘇鉄山（標高六・八メートル）に移る。いずれの「山」も、大阪湾の浚渫（しゅんけん）（土砂をさく）で出た土砂を積み上げて造った人工の山だ。天保山も蘇鉄山も、三角点がともとなかったり、廃止されそうになったりしたことが過去にあるそう。三角点がなくなれば、行政的には「山」ではなくなる。しかし、そのつど、近隣の住民が請願運動を起して、「日本最低の山」を守り続けてきたという。

「日本最高の山」が問答無用の強烈な説得力をもつのに対して、「日本最低の山」は何だかいいわけの多い①もどかしさがついてまわる。「最高であること」はすぐに納得できるのに対し、「最低であること」は行政的に認定しなければならぬからだ。②この非対称性が問題の根っこにある。

実際、そもそも「山」をどう定義するかはたいへんな難問で、また答えはない。直感的に「山」に見える地形のふくらみを「山」と呼べばすむ話ではないかと考える人がいても不思議ではない。しかし、周囲の土地から突き出て標高が高ければ「山」とみなすと機械的に定義してしまうと、公園の砂場で幼児がつくった「砂山」まで「山」とみなさなければならなくなるだろう。日本中、「山」だらけになってしまふ。これでは話にならない。結局、その土地の住民が古来「山」と呼ぶ土地の突起に対して、国土地理院が「三角点」を与え、初めて合法的に「山」とみなすしかないわけだ。

私たちは、「山」といえばついつい高い山を思い描くので、「山とは何か」という定義など自明だろうと軽く考えてしまいがちだ。しかし、高い山ではなく低い山にいったん目を向けると、「山」といえるかどうかの境界がぼやけてしまふ。高い「山」の明瞭さは低い「山」のあいまいさの免罪符（罪が許される証書）にはならない。だからこそ、国家や法律の助けを借りて「山である」と宣言するのである。

「山とは何か」という定義の問題は、分類が一般的に抱える問題そのものである。私たちの住んでいるあるいは通り過ぎる土地に、さまざまな程度の「起伏」があることは誰も否定しない。大地には確かに凹凸がある。しかし、その「凸」を「山」というグループに分類できるかどうかは、③必ずしも自明には決まらない。凹凸の程度は連続的であるのに対し、④「山」であるか否かはイエス／ノーの二者択一である。山である「凸」の集まりと、山でない「凸」の集まりとは、互いに排除し合う離散的な（はうきりと区切られている）集合である。

「連続なつらなり」からいかにして「離散的な群」を切り出すのか——分類という行為の根幹はまさにそこにある。そして、もともと分けられないものをあえて分けるという、分類そのものが抱える原罪（生まれながら持っている罪）的難問が同時に生じる。

（中略）

生物がいるところ必ず分類がある。いや、生物だけでなく、どんなものであってもそれらを分類することは、私たち人間にとって根源的な行為のひとつである。⑤「分類するは人の常」とは格言そのものだ。フォーマルな「学」である以前に、分類とはもつと身近なもの、つまりふつうに生活していればごく自然に身についている素朴な分類思考に根ざしているとみなしても問題はないだろう。たくさん対象物をひとつひとつ覚えらるるほど、私たちの大脳は性能がよくなる。⑥ばらばらの対象物を少数のグループ（群）に分類して整理することによって、はじめて記憶と思考の節約ができる。

たとえば、八百屋の店先では、スイカやナシのひとつひとつにばらばらな名前を付けて売ったりせず、必ず「スイカ」とか「ナシ」というグループで大括りしているはずだ。そうしなければ買い物客は自分が買いたい物をその場です

ぐに言えず立ち往生してしまつたろう。ふつうに生活している分類者にとって、身のまわりの事物は⑦「自然」に分類されていてほしい。それが、分類の最も原初的な姿である。

一方では専門科学としての分類学があり、他方では日常生活での分類がある。この両者の間にはどのような関係があるのだろうか。それとも、分類ということはこそ共通していても内実は何の関係もないのだろうか。これまでの生物分類学は、生物学の一領域として分類学を確立しようとしてきた。その理屈は単純で、生物分類学は生物に関する分類学なのだから、生物学の範疇（わくぐみ）に属すべきだという弁明だ。

⑧しかし、その理屈はまちがっているのではない。分類学はもともと分類に関する学であつて、たまたまその対象が生物であつたに過ぎないと考えても何の不都合もないだろう。さらにいえば、対象物に限定されない普遍的な（すべてのものにあてはまる）分類学を念頭に置くというスタンス（立場）は、分類という行為がもともと持っている共通の（つまり対象物にとられない）性格をあまり出さず、むしろつづがよいとさえいえる。

では、対象物から切り離された一般的な分類学とは何を問題にするのだろうか。先ほどの八百屋の店先の情景を思い浮かべてほしい。果物を買いに来た客は、「スイカ」や「ナシ」という見慣れた名前のグループはきつと何の違和感もなく受け入れるだろう。日本に住んでいる私たちは「スイカ」とは何か」とか「ナシ」とは何か」という問いに対して、無意識のうちに答えを用意しているからである。しかし、ある日、その八百屋の店先に「カニステル」とか「タマリロ」という聞いたこともない名前の果物が並んでいたとしたら、多くの客は開口一番こう言うにちがいない。⑨「それってどんな果物？」と。

（中略）

カモノハシは、現在の動物分類体系の中では、哺乳類の中でもっとも原始的とみなされている。しかし、カモノハシの分類学的地位が確定するまでに、十九世紀の分類学者たちは大いに悩み、論争し、その過程で分類体系そのものが揺らぐような事態にもたちいたつた。その理由は、カモノハシが既存（きぜん）にある分類群のいずれに帰属するのが容易に解明できない、「分類困難」な「変わりもの」だったからにはかならない。要するに、カモノハシはきれいに分類できなかったということだ。これは、分類することを生業とする分類学者たちにしてみれば⑩堪え難い屈辱である。

くちばしがあつて卵で生まれるのだからトリにもみえる。しかし、生まれた子が母親の乳で育つという点では明らかにヒトやイヌと同じ哺乳類だ。前肢には水かきがあつて、後肢には爪が生えている。カモノハシのひとつひとつの特徴を挙げていけば、いかに分類しにくい生きものであるかは誰にでもわかるだろう。ウンベルト・エーコイタリアの学者は、記号論の著書の『カントとカモノハシ』の中で「カモノハシは⑪あらゆる分類の試み——科学的であれ通俗的であれ——に挑戦するために生まれてきたような不思議な動物だ」とさえ述べている。

しかし、この⑫「カモノハシ問題」の責任を、カモノハシのせいにしてはいけない。個々の特徴がどうであろうが、その組み合わせがいかに奇妙であろうが、カモノハシは厳然として「そこにある」からである。どのような偏狭（へんきょう）なクツを捏ねたとしても、「実在」を消すことはできない。むしろ、「カモノハシ問題」の根っこは、生物の分類体系と分類理論にあるとみなすべきであろう。生きものの分類群と分類体系はどのようにしてつくられてきたのだろうか。分類のプロであるはずの分類学者にして、なお「分類困難」な生物が出現してしまつのはなぜだろうか。何よりも、そのような分類のダークゾーンは、私たち一般人には関係がないと言い切れるのだろうか。

（『分類思考の世界』 三中信宏）

問一 ①「もどかしさ」とありますが、「もどかしい」と意味が最も近い慣用表現を選びなさい。

- ア、耳がいたい
- イ、腹立たしい
- ウ、歯がゆい
- エ、口はばったい

問二 ②「この非対称性」とありますが、どういう「非対称性」ですか。最も適切なものを選びなさい。

- ア、「最高の山」は誰でも意見が分かれずに決められるのに、「最低の山」は皆の意見が同じにならない。
- イ、「最高の山」はすぐに決められるのに、「最低の山」はゆっくりと時間をかけないと決められない。
- ウ、「最高の山」は公式に決めることができないのに、「最低の山」は公式に決定しなければならない。
- エ、「最高の山」は一般人の人でも決められるのに、「最低の山」は権力者しか決めることを許されない。

問三 ③「必ずしも自明には決まらない」の内容を最も適切に表しているものを選びなさい。

- ア、いつのまにか決まるわけではない
- イ、わかりきっていることではない
- ウ、自分で決めるわけではない
- エ、思いどおりになることではない

問四 ④「二山」であるか否かはイエス／ノーの二者択一である」とありますが、「イエス／ノーの二者択一」と言えないものを一つ選びなさい。

- ア、気象用語の「真夏日」
- イ、星の明るさの「二等星」
- ウ、にじの色の「むらさき」
- エ、日本の地方の「関東」

問五 ⑤「分類するは人の常」とはどういうことですか。最も適切なものを選びなさい。

- ア、人間が普段の生活の中で分類することは有意義だ。
- イ、ふつうの人間は日ごろから分類するのが常識だ。
- ウ、人間をいくつかの種類に分類すると一定の法則がある。
- エ、人間はどんなものでも分類しがちなものである。

問六 ⑥とありますが、「はらはらの対象物をグループに分類して整理する」とはどういうことですか。「チョウ」または「チュウリップ」を例に、わかりやすく説明しなさい。

問七 ⑦「自然」に「とありますが、ここでの意味と対になることばとして最も適切なものを選びなさい。

- ア、先天的に
- イ、意図的に
- ウ、人工的に
- エ、社会的に

問八 ⑧「しかし、その理屈はまちがっているのではないか」とありますが、それでは筆者はどのように考えているのですか。筆者の考えに最も近いものを選びなさい。

- ア、分類学は、生物学とは異なる領域で確立されるだろう。
- イ、分類学は、今後すべての科学の根幹をなす考えとなる。
- ウ、分類学は、多様な対象物を持つ複雑さが問題である。
- エ、分類学は、広くさまざまな分野にわたる学問であるべきだ。

問九 ⑨とありますが、多くの客が開口一番「それってどんな果物？」と言う理由として最も適切なものを選びなさい。

- ア、名前がある以上は共通の特徴があるはずだ、と人は考えるものだから。
- イ、聞いたことのない名前なのに、人はだれでも興味を持つから。
- ウ、未知のものに対して、人はなぜその名前がついたかを知りたがるから。
- エ、人は名前の響きから、無意識に何に似ているか探そうとするから。

問十 ⑩「堪え難い屈辱」とありますが、なぜそういえるのですか。最も適切なものを選びなさい。

- ア、分類できないとなると、分類学者の知識の浅さが知られてしまったから。
- イ、カモノハシは原始的だと思っていたのに、そうではないとわかったから。
- ウ、分類できないものが、他ならぬ生物学の世界から押しつけられているから。
- エ、すべての物事は分類できる、という立場があちくなくなってしまったから。

問十一 ⑪「あらゆる分類の試み——科学的であれ通俗的であれ」とありますが、A「科学的分類」、B「通俗的分類」と同じ意味の表現を探し、それぞれ十字程度で抜き出しなさい。

問十二 ⑫「カモノハシ問題」とはどのような問題ですか、簡潔に書きなさい。

問十三 筆者の考えにあうものには○、あわないものには×をつけなさい。

- ア、もともと基準があいまいなものを分類する際には、人間が明確な基準を作る必要がある。
- イ、何でも分類できるという考えは傲慢で、人は分類できない悩みを受け入れるべきだ。
- ウ、世の中に分類できないものがあるのは、今までの分類の仕方に原因があると考えるのがよい。
- エ、人は頭の中を整理するために、日常生活の中でいろいろなものを分類しようとしている。

問十四 a「計測」、b「人造」、c「行政」、d「難問」と同じ構成を持つ熟語を次からそれぞれ選びなさい。

- ア、市営
- イ、読書
- ウ、春風
- エ、宣伝

